

選者 川口孤舟

参加者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 豊田ゆたか

西澤國護 星田啓子 山崎亜也

投句・選句 今井紀久男 熊谷くにお 小早健介 佐藤ただしげ 高橋康敏 田島正己

土谷堂哉 中川雅夫 長谷見びん 福島正明 古川百合子 古田昇 宮内規雄

山内天牛 渡邊盛雄

投句のみ 朱牟田恵洲 山田けい子

選句のみ 伊賀山そらお 梅崎くすを 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章

【互選句】○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

十点 空と海一枚にして鶴帰る 孤舟 (そ・くす・五・清・康・己・堂・○允・正・

われに棲む鬼にこつそり鬼は外 百合子 (紀・と・○千・龍・清・康・○己・○堂・啓・

天)

八点 棄ておきし鉢に息吹や新芽出づ 啓子 (紀・○くす・く・と・堂・ゆ・び・盛)

七点 ◎通院の老いに北風容赦なく 恵洲 (そ・紀・孤・忠・ゆ・隆・規)

◎茹卵つると剥けて春立てり 康敏 (孤・五・昇・啓・百・亜・天)

◎ほのぼのと明くる漁港や鱒の競り びん (紀・孤・千・ゆ・國・允・正)

六点 自在なる墨文字光り光悦忌 五郎太 (千・清・び・正・啓・規)

老猫に指定席あり日向ぼこ 堂哉 (くす・く・た・己・雅・規)

数えつつ昇る段々(きざし)梅かほる 啓子 (紀・千・孝・堂・允・亜)

五点 残雪に鉄打込めば土匂ふ くに お (紀・忠・啓・亜・天)

雛飾る能登にこころを寄せながら とみ子 (忠・び・允・昇・盛)

入魂の街角ピアノ風光る 健介 (清・己・堂・亜・盛)

◎結納の日取り決まりて春灯 堂哉 (紀・孤・五・健・昇)

◎月明かり氷柱は牙を磨きけり 國護 (孤・千・孝・清・百)

雪融くるひかり巻き込む音のして 啓子 (紀・○と・康・堂・三)

福寿草妻の遺影の笑顔かな 規雄 (そ・己・雅・允・昇)

四点 早春の漕艇の水脈煌めきぬ 孤舟 (五・健・康・三)

一陣の風木の芽山ゆらしけり くに お (そ・と・雅・規)

最頂の茶房気に入りの席春隣り 恵洲 (紀・健・○孝・盛)

冬深し沖一線の漁り火や 國護 (くす・健・た・孝)

◎今日もまた能登に積もるや春の雪 びん (孤・た・○龍・ゆ)

三点

小澤征爾を追悼

春一番飄々と逝くマエストロ
 けふ雨水リハビリ室に気合入れ
 雪降る日しずかに送る家族葬
 梅一輪小さき庭を明るくし
 成田屋のにらみ魚氷に上りけり
 大甕の辛夷の花の五つ六つ
 春きざす歯を磨きつつスクワット
 葉脈に紅差すごとき法蓮草
 昼食べて寝てもまた寝る春炬燵
 ◎流水の今朝着岸と弾む声
 庭に咲く椿を愛でる鳥と我
 ◎春節やひとひとの中華街
 薄氷(うすらひ)は雨にあわせてリズム出し
 ずつしりと医療費の束納税す

紀久男 全 (隆・〇正・〇昇)
 忠彦 全 (忠・〇隆・盛)
 全 (國・び・盛)
 孤舟 全 (ゆ・國・天)
 五郎太 (紀・五・允)
 とみ子 (紀・千・び)
 千恵 (〇紀・健・啓)
 正己 (清・百・啓)
 堂哉 (くす・雅・百)
 ゆたか (孤・く・た)
 びん (た・雅・國)
 けい子 (孤・ゆ・天)
 天牛 (紀・龍・百)
 (紀・〇健・正)

二点

座禪草いづもどこかに水の音
 ◎日溜りに人の群ある苗木市
 あいまいに会釈を返す梅まつり
 亡き父母の分も買ひをり鶯餅
 花ミモザ元氣あふるる黄色かな
 野崎村お光哀しや梅香る
 梅林の絵地図に探す現在地
 春節や朱に溢れたる中華街
 庭掃きて枯葉に話す老ひの身を
 薄氷に溶けて映れる青い空
 梅の香や国府に残る寺の跡
 寒戻る遠のく季節(とき)を引き留めて
 株高は我に閑せず納税期
 非戦こそ孫子の遺産建国日

孤舟 (く・康)
 五郎太 (くす・孤)
 全 (紀・天)
 とみ子 (紀・孝)
 千恵 (國・規)
 ただしげ (紀・五)
 康敏 (昇・亜)
 全 (國・正)
 雅夫 (紀・孝)
 國護 (〇そ・雅)
 昇 (と・康)
 啓子 (紀・百)
 亜也 (紀・龍)
 盛雄 (紀・隆)

一点

豊竹咲太夫を悼む

待春や切場語りを全うす

(文楽大夫の最高峰)

◎冬の雷忘れた頃に事変来る
 カーテンの風に膨らみ春眠す
 受験生リュックの色のとりどりに
 解決は時にまかせて花種蒔く
 冴え返るせめて一口義捐金
 なつかしき顔顔と会う新年会
 初雪や小鳥は庭で雪賛歌
 春月は波にゆらゆら瀬戸の海

紀久男 (亜)
 忠彦 (孤)
 孤舟 (龍)
 五郎太 (く)
 とみ子 (隆)
 健介 (紀)
 ただしげ (忠)
 ゆたか (た)
 全 (く)

再建の兆しの見ゆる春の能登
竹スキー雪道高くはしやぐ声
冬合宿クレメンタイン杯重ね
ガザの子の胸中の亀なほ鳴くや
第九振る年の名残や世も名残
宅急便の行き来激しや春の雨
白富士や黒きやまなみ際立たす
春寒や能登の余震の便り来る
鬼追へる言の葉哀し節分会
手を合わす妻の遺影や福寿草
見得を切る小さき役者や春時雨
地震(なる)有るも今年も雛のすまし顔
蛤や焼くより蒸すとこだはりぬ
マグカップ手に立春の夜を覗く
ZUKASEIの心根不憫姫すみれ

(揺れる宝塚歌劇)

全 (紀)
國護 (龍)
國護 (三)
びん (〇三)
全 (紀)
正明 (紀)
百合子 (そ)
昇 (ひ)
啓子 (三)
規雄 (紀)
けい子 (紀)
全 (規)
亜也 (隆)
盛雄 (と)
全 (紀)

~~~~~

【句 評】

十点句

空と海一枚にして鶴帰る

孤舟

五郎太さん・・・海と空との溶けゆくあわいを一枚と巧みに表現した。  
康敏さん・・・水天彷彿とした中を、鶴がV字型に隊形を組んで北国に帰って行く。雄大な光景だ。

堂哉さん・・・はるかな景色と鶴の一郡が見えてきました。  
允章さん・・・春になり、鶴たちが群をなして北国へ帰ってゆく。その姿が次第に遠ざかり、ついには空と海とが混然となったあたりへ消えて行った。

われに棲む鬼にこっそり鬼は外

百合子

とみ子さん・・・身中に鬼を感じる心の純真さが好ましいです。  
千恵さん・・・誰にでも程度の差こそあれ「黒い」心はあるのです。でも作者は「黒い」部分は人知れず捨て去りたい。存外良い人なんですネ。  
康敏さん・・・共感を呼ぶ句だ。それだけに類句も多い。例えば 胸中の荒鬼やらふ声に出づ 中原道夫、豆を打つ我が身の鬼も外に出よ 門間としゑ、豆打つも身の内に未だ鬼のをり 押田祐見子。  
正己さん・・・「われに棲む鬼」にはドッキリしますネ。また「こっそり」が微笑ましい。  
堂哉さん・・・はてさてどんな鬼でしょうか？早めに退治しておいて下さい。  
天牛さん・・・年を取ってやっと人間の本性の中に悪い心があることが分かりますよね。正直な方ですね。

八点句

棄ておきし鉢に息吹や新芽出づ

啓子

とみ子さん・・・放っておいた鉢に新芽を見つけた春の喜びが、伝わります。  
ゆたかさん・・・細やかな観察眼です。植物の生命力に感動した様子が伺えます。  
堂哉さん・・・正に我が家でもありました。可愛いさが募り、ごめんなさいと謝りました。

盛雄さん・・・時来ればやおら芽を出し花が咲く。植物の生命力は強い。大事にしてください。

※百合子さん・・・母の介護中に頂いた鉢植えのシクラメン、いくら何でももうお終いかと思っていた昨年暮れ、鉢に小さな蕾をふたつ見つけた時のあの喜び、何枚も写真に撮りました。母は五年前に他界しましたが。

## 七点句

通院の老いに北風容赦なく

惠州

孤舟選者・・・身体が不自由で老いた身にとつては、吹き荒ぶ寒風は身に堪える。

ゆたかさん・・・自然は老若におかまいなく非情です。

隆さん・・・自然とは追い打ちをかけることもある。

茹卵つるりと剥けて春立てり

康敏

孤舟選者・・・卵殻に針孔を付けてから茹でると殻が剥きやすいとか。

五郎太さん・・・俳味があり、情景が浮かびます。

百合子さん・・・茹で卵のあのつるるとした感じ、ああ春だよ。

啓子さん・・・「つるりと」剥けた卵に明るい春の陽射しが当たっているようで、平和です。

天牛さん・・・「つるり」がいいですね。春を待つ雰囲気がわかりますよね。

ほのぼのと明るる漁港や鰯の競り

びん

孤舟選者・・・能登の漁港が復興され、鰯の競りも間もなく再開されることが期待される。

ゆたかさん・・・ほのぼのと明るい漁港の雰囲気が感じられます

## 六点句

自在なる墨文字光り光悦忌

五郎太

千恵さん・・・光悦の国宝、船橋蒔絵硯箱の蓋に浮かび上がる書をご覧になったのですね。私も美しいと見とれたことを思い出しました。

啓子さん・・・光悦の文字は、自在という言葉ぴったり。力強くまたおやかな墨跡が、浮き上がりに光るほど美しく感じられたのだと思います。

老猫に指定席あり日向ぼし

堂哉

ただしげさん・・・なんとなく微笑ましい感じで面白い。

数えつつ昇る段々(きざし)梅かほる

啓子

千恵さん・・・梅を観るために長めの階段を登っているのでしょいか？あと何段あるんだと数えなくなるほどですね。

堂哉さん・・・最近階段が辛くなって来ました。苦労のかいあって、花が見えて来たり、香りが感じられた時の喜びが良く出ています。

※康敏さん・・・佳句ですが、仮名遣いが不正確です。新仮名なら「梅かおる」、旧仮名の場合は「数へつつ」「梅かをる」となります。

## 五点句

残雪に鍬打込めば土匂ふ

くにお

啓子さん・・・まだ雪が残っている畑。種をまく準備でしょうか、鍬を入れると黒い土が春の陽の中でふうつと息をつくようです。農耕民族の血が騒ぐ気が致します。

天牛さん・・・やつと見せた土に鍬を打ち込むなんて、暫く経験したことがなかったので昔を思い出しました。

雛飾る能登にこころを寄せながら

とみ子

盛雄さん・・・能登の惨状を思うと・・・

## 入魂の街角ピアノ風光る

健介

堂哉さん・・・あちこちの街角ピアノは楽しいですね！伊丹空港近くのモノレール駅にも派手なピアノがあります。

盛雄さん・・・功者も初心者も哀歓こもごもの駅ピアノ。＂入魂＂が良かった。

## ◎結納の日取り決まりて春灯

堂哉

孤舟選者・・・誠におめでたい。朧な春灯だが、ふたりの明るい未来を照らしている。

五郎太さん・・・季語が効いています。おめでとうございます。

## ◎月明かり氷柱は牙を磨きけり

國護

孤舟選者・・・厳寒の夜、月光に晒された氷柱は鋭く尖って輝いている。

百合子さん・・・月明かりを浴びながら牙を研ぐ氷柱、てらてらと光る牙、想像力に感嘆！

## 雪融くるひかり巻き込む音のして

啓子

とみ子さん・・・融ける雪に光が輝く様が詩のように詠まれています。

康敏さん・・・雪解けには様々な音が伴う。雪解氷、しずり雪、雪解川、雪崩…ひつくるめた

中七の大胆な表現に驚かされた。

堂哉さん・・・中七にひかれました。

## 四点句

### 早春の漕艇の水脈焔めきぬ

孤舟

五郎太さん・・・水が温み、ボート部が練習を始めたようです。戸田あたりでしょうか。

康敏さん・・・戸田の漕艇場に大学の艇庫があり、ボートをよく漕ぎに行った。コックスの号令

に合わせオールを漕ぐ爽快さを思い出した。

【参考】孤舟選者・・・水脈（みを）の「脈」を「尾」とすると読みは同じで鳥が泳いだあとの

「みを」を指すことになります。

### 一陣の風木の芽山ゆらしけり

くにお

とみ子さん・・・一陣の風が、山全体を目覚めさせてゆく様子が春らしいです。

### 巖頂の茶房気に入りの席春隣り

恵洲

孝岳さん・・・良く通う喫茶店のお気に入りの席で心地よい時間を過ごしている筆者は、春がす

ぐそこまで来ていることを実感している。その情景が目には浮かびます。「茶房」

のレトロ感が強い。

盛雄さん・・・行きつけの茶店のいつもの席。落ち着くでしょう。＂春隣＂の季語が良い。

### 冬深し沖一線の漁り火や

國護

ただしげさん・・・寒い冬の漁場の情景が感じられる。

### 今日もまた能登に積もるや春の雪

びん

孤舟選者・・・大自然は誠に意地悪い。せめて能登半島だけは穏やかな気象を送り込んでほし

い。

ただしげさん・・・地震被害に追い打ちをかけるような春の雪、痛々しい気持ち募る。

龍平さん・・・雪国育ちの私には雪降りは嬉しかったり恨めしかったり色々な想いが一入で

す。降ると大概暫くは消えませんので。耐え忍ぶ根性を付けるには良い面も。

ゆたかさん・・・自然は人の禍におかまもなく非情です

## 三点句

### 小澤征爾を追悼

### 春一番飄々と逝くマエストロ

紀久男

隆さん・・・名前は、関東軍の板垣征四郎と石原莞爾から。ワイシャツの襟のことで文句を

言ったら、父開作が「音楽は心の芸術だろう。襟で文句いうなら音楽はやめちまえ」と。恩師齋藤秀雄は怒ると眼鏡を投げつけ、さらに眼鏡を踏みつけた。春一番が似合うマエストロだった。

正明さん・・・マエストロ小澤のご逝去残念です。ご冥福をお祈りします。

昇さん・・・大指揮者の死は衝撃でした。日本のクラシック界からあんなに世界的な人が出ようとは。物凄いことです。風貌から飄々と逝かれた印象があります。合掌。

けふ雨水リハビリ室に気合入れ 紀久男

隆さん・・・「作品は生みつづけられなければならない。この世に、避けられない死といふものが存在し、抑え得られない愛といふものが存在するが故に」（草田男）こういうことかも知れない句。

盛雄さん・・・草木の芽吹く季節の変わり目、リハビリも気合を入れて元気を出す、作者の気持が伝わってきます。

梅一輪小さき庭を明るくし 忠彦

ゆたかさん・・・一輪の花で周囲を明るくする雰囲気を感じられます。

天牛さん・・・春を待つ人間には本当に一輪でも充分ですよ。

成田屋のにらみ魚氷に上りけり 孤舟

五郎太さん・・・迫力ある睨みだったのでしょう。使いにくい季語を上手く配されました。春さざす歯を磨きつつスクワット とみ子

啓子さん・・・歯を磨く洗面所も春が兆して縮こまっていた背筋も伸びるようです。早速に「ながら」運動も日課にできそうです。日常のちよつとした嬉しさを巧く表現されていると思います。

葉脈に紅差すごとき法蓮草 千恵

百合子さん・・・濃い緑の中のはんなりとした紅、栄養もあるらしいですね。

啓子さん・・・最近の法蓮草は紅が濃く生命力を感じさせる。美しく、日本画の材料になりそう。「紅差すごとし・・・」とするのは如何でしょうか。

昼食べて寝てもまた寝る春炬燵 正己

百合子さん・・・お腹が満たされて炬燵に足を入れると寝ても寝ても眠い春です。

流水の今朝着岸と弾む声 堂哉

孤舟選者・・・地球温暖化のためか流水の着岸が遅れていたが、幸運にも今朝漸く見ることができた。

ただしげさん・中七の表現が面白い。

春節やひとひとの中華街 びん

孤舟選者・・・インバウンのド影響もあり、春節の中華街の人出は尋常ではない。ゆたかさん・・・ひとひとと重ねた表現が雑踏の情景をよくあらわしています。

天牛さん・・・こういう雰囲気は日本人にはないですね。

薄氷(うすらひ)は雨にあわせてリズム出し けい子

百合子さん・・・薄氷がぼたんぼたん溶ける音、リズムカルに時を刻む音。

ずつしりと医療費の束納税す 天牛

健介さん・・・二人分の医療費はまさに「ズッシリ」です。「納税」を季語として選びました。

正明さん・・・今年から納税がスマホで済みました。時代は変わりました

※句会・その他から・・・今回数件ありましたが、「納税」は季語ではありません。確定申告のみが季語となっています。

二点句

座禅草いつもどこかに水の音

孤舟

康敏さん・・・山間の湿地帯で雪を割って出芽し、早春に達磨が座禅をしているような花を咲かせる。雪解水の流れる音が絶え間なく聞こえる。

(参考・青き野の割れて水鳴る座禅草 堀口星眼)

日溜りに人の群ある苗木市

五郎太

孤舟選者・・・まだ寒さの残る中での苗木市。日当たりのよい場所に陳列された苗木に人気が集まっている。

あいまいに会釈を返す梅まつり

五郎太

天牛さん・・・人生の生き方に長けてくると、こういう事が多くなりますよね。

野崎村お光哀しや梅香る

ただしげ

五郎太さん・・・歌舞伎の名場面、想う人を送り出し号泣。紅白の梅の木が匂っています。

紀久男・・・本来、野崎村では菜の花盛りとほぼ決まっているので、舞台上にあっても、梅で詠うのが良いのか、上品すぎないかとやや引つ掛かります。

春節や朱に溢れたる中華街

康敏

【参考】亜也さん・・・中国の旧正月の飾り物は縁起の良い色とされる「紅(真紅)」を使います。

梅の香や国府に残る寺の跡

昇

康敏さん・・・武蔵国の国府は現在の府中市にあった。国分寺跡や国分尼寺跡も発掘され公園に整備され、梅が盛りである。

寒戻る遠のく季節(とき)を引き留めて

啓子

百合子さん・・・三寒四温、すべては流れていくことを分かっているからこそその惜しむ気持ち・・・

株高は我に関せず納税期

亜也

龍平さん・・・岳父は株や。然し家訓は株はするな!!であった。

※孤舟選者・・・確定申告は季語となるも、納税期は季語ではありません。

※康敏さん・・・納税期を季語とした句は結構ありますが、歳時記に「納税期」は載っていません。国税は種類により納税期にばらつきがあり、3月と決まっていないからでしょう。

非戦こそ孫子の遺産建国日

盛雄

隆さん・・・「あしたへの最上の遺産建国日」でも。終戦の喜びを喪失した国家が増えてきた。

一点句

冬の雷忘れた頃に事変来る

忠彦

孤舟選者・・・元旦の能登半島地震。大晦日の雷はこの予期せぬ災害の予兆だったのか。

解決は時にまかせて花種蒔く

とみ子

隆さん・・・言外に、それでも咲かない花もある。人生ですね。

初雪や小鳥は庭で雪賛歌

ゆたか

ただしげさん・・・初雪・雪讃歌は季語重なりでは？

竹スキー雪道高くはしやくぐ声

國護

龍平さん・・・幼時にタイムスリップ出来ました Thanks.

冬合宿クレメンタイン杯重ね

國護

【参考】國護さん・・・クレメンタインはアメリカ民謡。南極大陸調査第一弾の西堀元隊長が京大山

岳部にいた時期、吹雪で足留めされた温泉で仲間と共に部歌を作ろう！と楽曲はそのままに歌詞を作り雪山賛歌としたもので、後に山の関係者に広まったという。

ガザの子の胸中の亀なほ鳴くや

びん

三恵さん・・・「ガザ？亀？」視覚的にまず惹かれました。そして、以下自分で勝手に解釈しました。本当は大声をだして泣き出したはずの戦火の中の子供たちの声なき声が厳しい冬をへて、少しづつ暖かくなってきた季節に「亀が鳴いている」ように希望を捨てていない内なる叫びとして聴こえてくる。

白富士や黒きやまなみ際立たず

百合子

※句会にて：季語がありません。白富士は雪を被った富士と想像はつくが季語には当たらない。※康敏さん・・・「白富士」は季語ではありません。「雪の富士黒きやまなみ際立たず」では？春寒や能登の余震の便り来る

昇

びんさん・・・殺生な余震！

春寒や能登の余震の報せ継ぐ・・・などとしても如何。

見得を切る小さき役者や春時雨

けい子

紀久男・・・「見得を切る」とはよく使われる言葉ですが、ここは本来の「見得を決める」としてほしいところ。参考で云えば舞台上でのパフォーマンス、とんぼ（大部屋連中の殺陣）は、「とんぼを切る」です。

蛤や焼くより蒸すところばかりぬ

亜也

隆さん・・・食通か。故郷のサツマイモは時間をかけて焼く。

### 《留意事項など》ご出句の中から短評として《

はこべらや鳥に馳走と教へけり

康敏さん・・・切字の「や」と「けり」の併用はタブーです↓はこべらを鳥に馳走と教へけり。また上五を「や」で切った場合、中七・下五は上五とは関連のない内容にして、二句一章にするのが定石です。（例：はこべらや名をつけて飼ふ白うさぎ 大串章）

※また今月は季重なりも多く句会においても話題となりました。今後の作句時にはご留意ください。



## 青葉会次回日程

三月二十一日（木）**（ご注意下さい）第三木曜日です！** 十三時〜

句会場：世田谷区三軒茶屋 世田谷区役所支部 5階 しゃれなあと会議室

（ご出席者は、当期雑詠の句、ご出句の方はご句を目処としてご提出ください。

（ご提出締切日：三月十九日（火）午前中までに 星田メルアドあるいはFAX（03-3421-9772）にてご提出ください。

## 青葉会会費について

令和六年度（4月〜令和七年3月） 青葉会費を集めます。

（ご出席を主とされる会員様 一万円

（ご投句・選句中心の会員様 五千円



※ご出席が主になられる方はご出席の句会時に頂戴致します。

※送り先（いずれでも結構です） 在間千恵宛て 〒156-0054 世田谷区桜ヶ丘 3-35-13-301

星田啓子宛て 〒154-0002 世田谷区下馬 3-16-3

※選句のみの会員さまには、今後選句をご継続いただけますよう、何卒よろしくお願い致します。



## 【青葉会報】

一、二月句会は、いつもの世田谷三軒茶屋の世田谷区役所支部のしやれなあどの階会議室にて催行。日程が予定はしていたものの、通常より一週間遅い設営だったこともあり、既に予定を入れてしまっておられた方々もありましたが、急遽お越しになれず既に出句されていた句をそのまま生かすなど、句数の数には通常とさしたる差はなく、選句に勤しみ楽しまれたたのお言葉を頂いております。結果はご覧のように、孤舟選者と百合子さんが同点最高値でした。点数のばらつきを見ますと、佳句が多く、皆さまには選句のご苦勞を楽しまれたご様子が窺われるようです。

二、三月の句会はまた場所が取れなかつた事情から、21日(木) 第三木曜日となりますが、季節も愈々春爛漫。奮ってのご参加を期待致しております。  
尚、4月以降は元に戻り原則として第四木曜日の開催となります。

○五月に関しては、例年の吟行を実施予定です。前回の句会にて、港区白金台の「国立科学博物館付属 自然教育園」と決まりました。目黒の駅から徒歩20分、東京メトロ南北線、都営三田線白金台より徒歩7分という立地です。吟行スタートは午前十時、句会はその後一駅先の五反田にて開催予定です。本件は別途ご案内致します。  
併せて別途今後の日程と場所を一覧表にてお届けいたしますので、ご確認下さい。

## 三、孤舟選者 近詠

詩心昂る潮騒の冬北斗  
かまくらや星の雫の粲粲と  
浅春のコートの襟を少し立て  
スプーンは涙のかたち春北斗  
心にも痛点のあり蘆の角

## 関係者近詠

紅梅に着物一枚脱ぎにけり 隆  
(通常は選句のみの 橋口隆さん)

令和六年三月十日

(了)